

キリシタン実録類と江戸の商業活動

— 『伊吹艾』 を中心に —

The narrative of the missionaries and Marketing in the Edo: *Ibukimogusa*

南郷 晃子
Koko NANGO

I はじめに

突然の登場とともに宗教的な同化をせまったのが、16世紀末の日本社会にとっての宣教師である。彼らは当然のように摩擦を引き起こすが、それでいて莫大な信者を獲得する。信者増加に大きく寄与したのが、宣教師の治癒の力であり、イエズス会士の報告集では彼らが人々を病から救う様が繰り返し語られる。姉崎正治は、そのような彼らの救済事業は後世にも記されたと言う¹。

「バテレン等の布教は国を奪ふ為だと憎み且つ恐れた方面にも、その救済事業を認めざるを得なかったことは明である。即ちキリシタンに対する嫌悪が固定概念になった時代に出来た書物にも記している。」

姉崎が続いて引用するその「書物」が、ここで論じようとするキリシタン実録類である²。

18、19世紀、貸本屋を中心に「実録」といわれる種類の写本が流行した。版本の形では憚られるような大名家の醜聞などが「実録」として写本で広く読まれたのである。これらのうちに「キリシタン実録類」といわれる一群のものがある。『切支丹宗門来朝実記』『南蛮寺興廢記』等の様々な題名を持つ諸本が、それぞれの内容は大きくかわらない。

¹姉崎、1930、417頁

²「キリシタン実録類」という表現は菊池庸介氏によるものである。（「キリシタン実録群の誕生」『静大國文』四十四号、2005年、『近世実録の研究-成長と展開-』汲古書院、2008年）実態を端的にあらわしており、本稿もそれにならいたい。

このうちにバテレンの治療行為を物語る箇所がある。そのまま史実としては受け取れないが³、宣教師たちが医療事業に従事した布教期の景観を踏まえてのものではあろう。しかし表象の意味を読みとくためには、布教期の宣教師の活動と関連付けるのみで議論を終わらせるべきではない。作品が享受された時期の社会背景を踏まえた、異なるアプローチが必要になる。禁教が行き届き、イメージとしての「バテレン」しか存在しなくなった時代の表象として、検証を図るべきであろう。

本稿では、特に『伊吹艾』系統のタイトルを持つものに着目し、近世中後期の活発な商品経済活動と「キリシタン実録類」を関連づけることを試みる。まず、実録類検討の前提として布教期の宣教師の治療行為を簡単に確認しておきたい。

II. 布教期における宣教師の治療行為

布教期の宣教師による医療活動として、たとえばイエズス会が豊後の国府内に建てた病院が広く知られている。以下、ルイス・フロイス『日本史』から引用をする⁴。

第十四章（第一部第十六章）

「前にバルタザール・ガーゴに付与した地所は二つに分けられた。その一つは死者を葬る場所に当て、他には国主（大友義鎮）の許可を得て病院を建てたところ、国主をはじめ国中の人たちが大いに喜んだ。病院は二つに区分され、一方にはこの国に大勢いる癩病患者が⁵、他方には種々の病人が収容されている。ルイス・デ・アルメイダ修道士は彼らを治療する腕前の持主で、毎日二回治療に従事しており、同様に一人の日本人も働いているが、彼はまるでイエズス会員のようにはなだ善良な人である。」

ハンセン病患者とそのほかの患者の治療病棟を設け、特にルイス・デ・アルメイダが治療に従事した。アルメイダは外科医免許を持つイルマンであるが⁶、府内病院は外科治療だけを行っていたわけではない。

第十五章（第一部第十七章）

「我らの主は、聖水によってこれらの人々に多くの慈悲を授け給うたのであり、病気を患っている異教徒たちは、熱病、そのほかの病気に対して効果のあるその薬水を教会へ求めに来させるほどであった。」

西洋の技術に基づく治癒と聖水による治癒が等しく行われ、人々は病から回復するのである。

³海老澤有道は天文年間の京都でバテレンが医療事業を行ったことは確認できないとする。（海老澤、1944）

⁴松田毅一、川崎桃太約『完訳フロイス日本史』第七巻、中公文庫、2000年

⁵文献からの引用であるためそのまま使用している。

⁶アルメイダについては東野利夫『南蛮医アルメイダ―戦国に本を生きぬいたポルトガル人』柏書房株式会社、1993年、が詳しい。

病院では、十年も二十年もかかっていた外傷や潰瘍が治療され、十五日で快癒した者も幾人かいた。主なるデウスは、その地で、人々が真のデウスを認めるようにしようと、その他幾多のことを行い給うた。数名の者は、病を癒されようとして、五十里も六十里もの遠くから来訪した。

外科治療は、訓練によって獲得可能な技術、知識である。一方で、聖水が効果を発揮するためにはバテレンの霊力への信頼が必要となる。彼らの技術と聖水などへの、いわば信仰の力による病の治癒が、バテレンたちの霊力を保証するものとなり、ひるがえってバテレンたちの霊力への信仰が、病を治癒していった⁷。それらは当然信徒の獲得につながっていった。しかし一方で、霊力への信頼は恐れ、忌避といった感情とも表裏一体である。

フェルナン・ゲレイロ編「イエズス会年報集」⁸

特に或る司祭に至っては魔法を使うために多くの人から目玉を抜き取っているから、彼には用心するようにと言いあったり、或る人を殺し他の人を富ませる事に用いる毒を死体の肝臓で作るために、死体を掘りおこして腹をあけていると互いに話していた

宣教師は共同体に入り込んだ他者に他ならず、宣教師の霊力は、彼らを信用しない人々には脅威である。宣教師の報告集には、人々の彼らへの畏怖がちりばめられている⁹。

この200年程のち、徹底的な禁教と弾圧の結果として、宣教師は想像上の存在になる。そしてそのような時代に、身体を癒す「艾(モグサ)」を題名にもつ宣教師の物語が流布するのである。キリシタン実録類『伊吹艾』の検証を通じ、宣教師がいない時代の宣教師の治癒の表象について、考察を進めていきたい。

III. 『伊吹艾』の検証

3.1 キリシタン実録類の概要、特に治療の記述について

さてキリシタン実録類であるが、非常に広範に流布しており、悉皆調査が喫緊の課題である。困難な諸本調査の取り組みを行っている先行研究として、菊池庸介「キリシタン実録群の誕生」¹⁰、京篤二郎『耶蘇宗門根元記』がある¹¹。詳しくは後述する。

⁷病気の治癒に直接的に力を発揮したのは、キリスト教への信仰よりもむしろ、目の前の異国人、バテレンへの信仰だろう。東馬場郁生「キリシタンの象徴とその意味」『キリシタン史再考—信仰受容の宗教学—』天理大学附属おやさと研究所、2006年参照

⁸松田毅一監訳『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第一冊、同朋舎、1978年

⁹拙稿「フロイス『日本史』にみる宣教師への悪口」『国際文化学研究推進センター2015年度研究報告書』国際文化学研究推進センター、2016年参照

¹⁰前掲注1。菊池氏は、享保七年の出版取締令により出版が憚られるようになった『吉利支丹物語』に替わり流布した可能性を指摘する。

¹¹京篤二郎『耶蘇宗門根元記』名古屋キリシタン文化研究会、1994年

まずキリシタン実録類のうち、最も入手が容易な『続々群書類従』第十二巻所収の『切支丹宗門来朝実記』に沿いごく簡単に粗筋をのべる¹²。

日本奪国を企む南蛮国の王は、切支丹の力で日本の人心を和らげるため、天倫峯の道術者である切支丹宇留岸伴天連を日本に使わす。宇留岸伴天連は信長に布教を許可され南蛮寺を建立し、その助けとして富羅天伴天連を呼び寄せる。富羅天伴天連とともに、いるまん「げりごり」「いりやす」も来朝し、布教を行う。秀吉の御代になり、日本人同宿「はびやん」が宗論にまけたことにをきっかけに切支丹宗門が邪宗であることが明らかになる。伴天連、いるまんは南蛮へ帰される。残された日本人同宿のうち「ごうずもう」「しゅもん」は正体を隠し秀吉の前で奇術を行うが、正体が露見する。切支丹の詮議、誅伐が始まる。

来日に先立ち富羅天伴天連は南蛮王に金銀薬種を求め、次のように述べる。

富羅天申けるは、人の嘆く事は貧苦病苦也、我日本に渡り候はば、先貧苦の者には金銀をあたへ、病苦の者には薬をあたへ、此二つの物は人の可嘆第一なり、是を救はば無病福者と成て恩をかんじ、自ら此方へ随ん事目前也¹³

そして来朝後には信長に薬草園となる場所を願い出る。

存寄にて、貧苦病苦の者を救んため多の薬草を持来り、其種を植る園を願ければ、信長の下知として、山城近江兩州の内にて相応の地を可見立と有ければ、近江伊吹山薬草相応の土地なれば、五十町四方切平げ薬草を植けり

この箇所が、キリシタン実録類のうちに『伊吹艾』系列の題名が含まれることにつながる。バテレンたちは南蛮寺を拠点に、貧しい人に金銀を与え、病の人々には療治を行う。

南蛮寺よりは、毎日人を廻し、橋の下に寝臥たる乞食非人、或は山野に捨られたる業病之者、其外在々町方にて難治難病の世を渡り兼る貧苦の人などを尋出し、寺へつれ来り、貧人には金銀をあたへ、病人には伊留まん療治を加へければ、十に八九ツは本腹し、其上衣服等をあたへければ、昨日のつづれ今日は錦を身にまどひ、恩を関する者数知れず¹⁴

バテレン登場の場面でこそ、彼らは空を飛ぶ道術者だが、国内の布教過程に関しては、事実をなぞっているように思える部分も多い。先の府内の病院に関わる記述にもみられたように、宣教師達が特に力を入れたのはハンセン病患者の治療である。時期や場所の正確さは

¹² 寛政元(1789)年写『切支丹宗門来朝実記』（『続々群書類従』第十二）所収

¹³ 引用に際し、漢字は全て常用漢字に改めている。

¹⁴ 前掲注 8 から引用。差別的な表現が含まれるが、引用のためそのまま記した。

さておき同書で「伊留まん療治を加へけ」る前提となる過去の景観が存在する。では、その記述をどのような意味付けで理解するのか。布教期同様の信仰と畏怖がそこにあるとみるわけにはいかない。近世中後期という時代の文脈のなかでの理解が必要である。そのための試みとして『伊吹艾』を考える。

3.2 『伊吹艾』系統の題名をもつキリシタン実録類

おおよその粗筋を同じくするキリシタン実録類の諸本であるが、先述の通り題名はいくつもの種類がある。菊池庸介氏は『日本古典籍総目録』から『伊吹もぐさ』『切支丹記』『切支丹由来』『南蛮寺興廃記』『耶蘇宗門根元記』等、96種類もの題名を挙げている¹⁵。このうち『伊吹艾』系統の題名と言えるのは『伊吹もぐさ』『伊吹艾因縁記』『伊吹蓬由来』『伊吹艾草記』『伊吹山薬草園のこと』の6冊である。

以下に挙げるのは私自身が直接確認できた『伊吹艾』系列の題名を持つものである。

- ・大阪府立図書館『伊吹艾』（安永六年）
- ・天理大学図書館『伊吹艾』（文化九年）
- ・国際日本文化研究センター宗田文庫『伊吹艾因縁記』
- ・関西大学図書館増田文庫『伊吹艾因縁記』
- ・花園大学図書館所蔵『切支丹由来之事 伊吹山薬草園のこと』（昭和三十八年写）
- ・三宅宏幸氏所蔵『江州伊吹艾物語 全』

さらに菊池氏が自身で確認したとして挙げるキリシタン実録類のうち、同系統の題名を持つものは以下の通りである。

- ・国立国会図書館所蔵『伊吹艾因縁記』（明治三年）
- ・国立国会図書館所蔵『伊吹艾の因縁記』（文政十年）
- ・徳島県立図書館森文庫『伊吹蓬』（宝暦七年）

非常に数の多いキリシタン実録類の中にあって、『伊吹艾』系統の題名を持つものは割合として大部を占めるわけではない。しかし私の調査はごく手近で確認出来る範囲であり、『伊吹艾』系統の題名を持つものは一定数存在するとみなすことができよう。

ではなぜ『伊吹艾』なのか。『伊吹艾』系統以外のキリシタン実録類の題名には、「切支丹」「南蛮」「耶蘇」といった言葉がならぶ。『伊吹艾』は一見して異質である。直接的な答えは、当該実録類のストーリーのうちにバテレンが薬草園を伊吹山にひらいたという一節があるためである。だがそうであっても、バテレンが来朝し去っていく顛末を語る物語の題になぜ特別にその箇所が選ばれたのか。その「答え」を求めるため、もう少し「直接的な答え」の検証、すなわち伊吹山の薬草園に関する記述の検証を続けてみたい。

¹⁵菊池、2008、531-534頁

3.3 「イブキモグサ」由来譚としての『伊吹艾』

まず『切支丹宗門来朝実記』だけではなく「艾」なのかわからないため、それがわかる天理大学本『いぶき艾 全』を引用する¹⁶。引用に際し、漢字は全て常用漢字に改めた、また私に句読点を補った箇所および書き下している箇所がある。以下同書の引用に関してはすべて同様のこととする。

先貧苦成又は病人多し。此両様を救ふに薬種多く入へし迎、先薬草園の地を願ける処、尤也とて、信長公より山洲江洲両国の内にて見立申へし、との仰にて、江州伊吹山に五十町四方の地面を開き、薬草薬木の苗を取寄、三千万种植し故、今に残り有。別して艾を南蛮流の外治に用ひ、他に勝れしゆへ調宝せり。

バテレンたちは、南蛮国から薬草を持ってきたのではなく、信長から伊吹山の地を譲り受けたのち、薬草、薬木の苗を取り集めている。そして薬草、薬木は「今に残り」、わけても艾（もぐさ）を南蛮流の治療に用い大切にしているというのである¹⁷。伊吹山に残った艾が「今」に利用されている。

さらに、天理大学本『いぶき艾 全』には同書が伝来した由来が前書きに記されている。そこにはなぜ「伊吹艾」なのかの理由がより明確に表れている。

安芸国広島の城下に柴田吉左衛門と云者有。齡ひ三十に足らぬ身にて、相馴し妻をめひどの旅に赴かせ、古き襖におもひを重し忘かたみの一子も程なく死出の旅路に先たて、浮世物うく暮す甲斐なき身を恨み、妻子の為と二親に暇を乞て元禄二年廻国の行脚の身と成り。野ニ臥し山に仮寝して、終に東武に下り、此処に足を止て居たりしか、古郷の事をおもひ出せば、二親の事もいと心もとなく、今迄捨置他国住居する事は天の咎めも恐敷、安否聞んと思立行。程なく近江国に懸り伊吹山近く柏原の里に着ニけり。折節西国方の大名の御泊り故、宿求むべき便なく、教信寺といふ寺え立寄、此由を語り、気色も勝れざれば留め給われ、と願ひければ、住僧の曰、安き事成迎心能請、別て当分なから不快の由、快気有迄逗留し給へ、と世話深く云ければ、言葉にしたがひ日を送りけるに、国々の事かたりける。廻国の時名を西心と改めける。或時西心申けるは、国々に蓬は野山に沢山有ものを、何故に伊吹艾迎もてはやし候、不審さよ、と云ければ、住持宣ふは、されば夫に付子細有。其昔南蛮国より、蓬の種を持来り植し故、伊吹山に生茂り今に至り、南蛮流の外治もてはやし南蛮の蓬を灸治に用るに其功世に勝る迎重宝せりと云。西心又問、何故に南蛮より種を持来り植しぞと云。されば其事の書たるもの有、とて見せ給ふ。是を写し国元の土産に願ひければ、写迄もなし、此方に入用のものに非らずとて給りしを、押頂き、笈の内に入れ古郷に帰りしに、最早父は死して母斗存命居たる故、孝を尽し居る内に、母も空敷成りければ、骨を高野山に納めんと、彼書物

¹⁶ 天理大学図書館所蔵、文化九（1812）年写し、梅本重永蔵本。

¹⁷ 『坂田郡志』は「信長の時外国種の薬草を同山に移植せしは事実なるが如し」と述べるに留めるが、それをうけた三田村元鐘は「お灸に用いるヨモギ(艾)はポルトガルから伝えた伊吹艾にして、灸術もバテレンが伝授したところである。」とする(三田村、1941、199頁)。言うまでもなく灸はキリスト教伝来よりはるかに古く、事実ではない。

を懐中し、高野山に登り骨を納めて帰りける時、天王寺辺にて宿致しけるが、折節中山仙右衛門といふ侍、是も同国なれば名乗しが、西心俄に煩て、仙右衛門に申やう、私死て有ならば、天王寺にて逢たる西心がかたみと云出し被下候、彼懐の書物を仙右衛門が前に指置、此間御介抱不浅、忝御礼申しがたく、金銀逆は無御座、此書物を進上仕ると指出せば、仙右衛門指て望むものにもあらねども、志にて給る故、忝と挨拶し貰ひ置けるが、此仙右衛門も其後貧しき身と成り、死けるにや、紙くず貰の手に渡り、夫より本屋買求め畢。

妻子と死に別れ、廻国行脚を行っていた広島柴田吉左衛門は、帰郷の途中で近江国伊吹山柏原の里で、宿に困り教信寺に逗留する¹⁸。その折りに「伊吹艾（もぐさ）が」重宝されるのはなぜかと住持に尋ねる。住持は、伊吹艾が南蛮国からもたらされた蓬を灸治に利用しているためであると答える。柴田吉左衛門、西心と名を改めているが、西心はなぜその種が南蛮からもたらされたのかと重ねて尋ねる。住持はそのことが書かれている書物がある、と本を差し出す。それこそが本書である。

この「前書き」は『いぶき艾』という題名の理由を詳らかにする。同書は世にもてはやされる「イブキモグサ」の由来譚として出現した。その題名が『いぶき艾』であるのは、当然のことである¹⁹。

菊池庸介氏、京篤二郎氏は、それぞれ諸本整理に関連しこの「前書き」に言及している。菊池氏は、序文に信長批判があるかどうかに着目し、諸本の分類を試みる。氏はそこで、「広島の浪人が廻国の修行に出、近江国柏原の寺で艾を見つけ、それに関連した南蛮の書もらい、それが同国の浪人中山仙右衛門に贈られ伝来した」という記述が、信長批判のない系統の一部にあると指摘する²⁰。

一方、京氏はキリシタン実録類を二つの系統にわけ、ひとつは『切支丹宗門来朝実記』のように「来朝記」を題名に含むものを中心とする「来朝記系」、もうひとつは『耶蘇宗門根元記』のように「根元記」を題名に含むものを中心とする「根元記系」であり、『伊吹艾』の題をもつものは根元記に入れる。

この京氏の検討は大きな意味を持つと思われる。氏は、両者の相違点を列挙するが²¹、そのうちのひとつが「前書き」についてである。「根元記系」には、約千字の前書を付けたものが見受けられる。これには中仙道柏原宿の寺で入手した経緯が書かれている。」と指摘する。また京氏は、薬草園について記述順序が両者で違っていると言うが、それとともに、根元記系のみが「伊吹艾の効能」を語るとする。

「前書き」で西心は「なぜ「伊吹艾」ともてはやすのか」という質問をした。それに対する住持の答え「南蛮流の外治もてはやし南蛮の蓬を灸治に用るに其功世に勝る逆重宝せり」は、先に引いた薬草園に関する箇所に見える「別して艾を南蛮流の外治に用ひ、他に勝

¹⁸ 柏原に「教信寺」はないが、諸本のうちには「きょうせいじ」と記されているものがある。京、1994年の指摘するように近江国柏原村には教誓寺（浄土真宗本願寺派）がある。

¹⁹ なお、実録類の題名と区別するため、以降、物としての伊吹艾は「イブキモグサ」とカタカナで表記するものとする。

²⁰ 菊池、2008、141頁。

²¹ 京、1994、86-96頁。

れしゆへ調宝せり。」という言葉と対応しているように読める。京氏の指摘を踏まえると「前書き」も「伊吹艾の効能」への言及も「根元記系」の特徴であり、この二つは不可分なのではないか。「前書き」は『伊吹艾』系列の題名を持つすべてにあるわけではない。写本の過程でどちらかが抜け落ちたか、当初はどちらかだけだったところに、あとから相応の記述が加わった可能性がある。「前書き」と本文中の艾の記述の対応は、諸本整理の道筋のひとつとして留意すべきであろう。

京氏はさらにこの前書きが事実であるならば、とした上で排耶書(キリシタン実録類)の成立年代を「大体十七、八世紀の交」とみる。しかし話ができすぎており、やはり創作とみるのが妥当だと考える。柴田吉左衛門、西心が同書を入手した「柏原」は伊吹山近く、中山道の宿駅がある地域である。そのため「西国の大名」の一行と鉢合わせるのだが、『近江輿地志略』が「柏原駅」「今此地にて多く伊吹山の蓬艾を売る也」と証言するように²²、同所は伊吹艾の名産地でもある。「柏原」での同書の発見は、イブキモグサの由来譚としての演出であろう。最終的に書を託されたのが「中山仙右衛門」であるというのも、あるいは中山道にかけてはいないかと想像する。

キリシタン実録類全体としての本来の形は、やはり「切支丹」「耶蘇」「南蛮」が来朝し、去っていくまでを語るものであろう。イブキモグサに関わる記述は、本文中一か所にすぎず、「前書き」とともに本文全体の流れとは無関係である。バテレンが来朝し、去っていく顛末を語る実録類の中、イブキモグサの由来譚としての装いが加わったものが、ひとつの流れを作っていたのではないかと考えられる。

次に近世期のイブキモグサ、すなわち伊吹産の艾をめぐる状況をみておきたい。

IV 「イブキモグサ」の販売とキリシタン実録類

4.1 商品としての「イブキモグサ」の流行

元禄十(1697)年刊行の『本朝食鑑』は「今江洲膽吹山之艾を以て勝れたりと為す」²³と述べる。このように伊吹産の艾が高く評価されるのは近世期を通じてのことだったようだ。寺島良安は「案艾江洲胆吹山及下野標地原之産最佳」と述べ²⁴、小野蘭山が「艾」の説明で「江洲伊吹山ノ艾、短小ニシテ香氣甚シ。故ニソノ熟艾、最上品トス。因テ今モ世人伊吹モグサヲ上品トスレドモ然ラズ。今ノ伊吹艾ハ一名ヌマヨモギ(後略)」というのも²⁵、伊吹山の艾を最上級とする通説の流布を示していよう。

²² 享保十九(1733)年成立、寒川辰清著、宇野健一改訂校註『新註近江与輿地志略 全』弘文堂書店、1976年参照

²³ 人見必大『本朝食鑑』巻一、元禄十(1697)年刊行、高知県立図書館山内文庫、国文学研究資料館マイクロ資料参照。書き下し南郷。

²⁴ 寺島良安『和漢三才図絵』巻九十四、正徳二(1712)年成立、東洋文庫

²⁵ 小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻一、文化二(1805)年刊行、国立国会図書館デジタルコレクション参照

他方、商品として「艾」の流通が活発になるのは、二代目団十郎が艾売りを演じたことを一つの契機とする²⁶。『歌舞伎年表』の宝永六（1709）年には以下の記述がある²⁷。

二代目団十郎、糸八郎役にて艾売せりふ大当り。江戸中の子供にて之をまねること流行唄の如し。

此年冬、笹ヤ藤助といふ者、浅草門跡前に艾店を出ス。其後享保中、大伝馬町二丁目へ三升ヤ五郎兵衛といふものも艾店を出し、大いに盛也。此頃神田紺ヤ町に小長の艾店あり。之も繁昌せしと云ふ。

二代目団十郎の演じた艾売りのセリフが受け、艾店の出店が相次いだという。江戸の小売店の広告を業種ごとに紹介する文政七（1824）年刊行『江戸買物独案内』では²⁸、薬問屋とは別に艾問屋が紹介されており、同時期の江戸には多くの艾専門店があったことがわかる。この中に「大でんま丁の三町目とをりはたご町」「本三升ヤ平ゑもん製」の「元祖御薬切艾」は「元来切艾と申事我家にてこしらへはじめ諸国へ売弘め申候」という宣伝文句を挙げている。『歌舞伎年表』では大伝馬町二丁目三升屋五郎兵衛であり、「大伝馬町二丁目三升屋平ゑもん」は胡散臭いが、二代目団十郎の影響の大なることが見て取れよう。

『江戸買物独案内』には、「伊吹山」の艾を扱っていることを売りにする艾販売業者が多くみえる。例えば芝口西応寺町の「尾張屋金次郎」の商う「真正艾」は「江州伊吹山艾清葉を撰み端午の葉露を受け製法す」と謳う。あるいは小網町二丁目の釜屋佐次郎が販売する「江州伊吹山かまやもぐさ」は商品名自体に伊吹山産であることが示されている。

キリシタン実録類が、バテレンが伊吹山の薬草園に植えた薬草のうち「今に残り有。別して艾を南蛮流の外治に用ひ、他に勝れしゆへ、調法せり」と述べる背後に、このような商品としての「イブキモグサ」をめぐる「今」がある。「前書き」における「何故に伊吹艾迎もてはやし候、不審さよ」という西心の問い、ひいては題名の『伊吹艾』も、流行商品としての伊吹山の切艾を眼前においてのことである。イブキモグサを介し、キリシタン実録類は、読み手にとっての「今」に連なる物語になるのである。

4.2 「釜屋艾」の本家争いと「根元記」

次に一つの仮説を呈示してみたい。前述のように「前書き」および『伊吹艾』の題名は商品としての艾の流行があった上でのことと考えられる。そのうえで『耶蘇宗門根元記』など「根元記系」の「根元記」という題名もまた「イブキモグサ」の流行と不可分なのではないか、という説である。

『江戸買物独案内』を読み進めると釜屋佐次郎の商う「江州伊吹山かまやもぐさ」とは別に「釜屋治左衛門」の「本家釜屋艾」がみえる。住所は前者が小網町二丁目、後者が小網町三丁目と非常に紛らわしい。加えて麴町七丁目とすきや河岸西紺屋町でも、それぞれ「釜屋

²⁶小池正胤「『日本蓬艾始』について」『叢 草双紙の翻刻と研究』第一二号、1989年が参考になる。

²⁷伊原敏郎『歌舞伎年表』第1巻、岩波書店、1956年、380頁、

²⁸中川芳山堂『江戸買物獨案内』文政七(1824)年、神戸大学住田文庫所蔵本閲覧

傳衛門」と「釜屋善兵衛」が「江洲伊吹山」と銘打った艾を売っている。話を整理するため、どうやら真似をされている側らしき小網町三丁目「釜屋治左衛門」に①、真似をしている側らしき小網町二丁目「釜屋治左衛門」に②と番号を振っておきたい。その他の「釜屋」にも必要に応じて適宜番号を加えるものとする。

①「釜屋治左衛門」を真似されている側、と仮にみなすのは、類似店歩の存在に最も神経を尖らせているのが同店であるためである。①小網町三丁目「釜屋治左衛門」は次のような注意を促している。

私店艾之儀者万治二己亥年より相始め江州伊吹山正真陳熟艾者他家無類にて則功能包紙に相記し売弘来候処近年私家名かまや艾之名目にて紛敷似せ物すでに同町に一軒同二丁目に二軒是等を始其外所々に数多御座候得共本家釜屋艾と申ハ私店一軒にて外に無御座候間何卒御用之節者小網町三丁日本家かまや治左衛門と家名能々御吟味之上不相替御用向被仰付被下候様偏ニ奉希候所々に似せ艾数多出来仕候に付為念如斯御座候以上

紛らわしい偽物が町内にある故家名をよく吟味した上で購入をするよう、勧めている。

しかし他も負けてはいない。②小網町二丁目の釜屋佐次右衛門は「於東都売弘所御問屋一軒の外無御候間能々御吟味之上御求可被下候」と宣伝文句に加え、③麴町七丁目の釜屋傳衛門は「釜屋艾元祖ニ御座候」と名乗る。「釜屋艾」の本家争いが起こっているのである。

国文学研究資料館や国立歴史民俗博物館所蔵の薬包からも、『江戸買物独案内』と同様の構図が見て取れる。つまり特に①小網町三丁目「釜屋治左衛門」が、「紛敷似せ物」への注意を促し、構わずに元祖を名乗る類似の店があるという構図である。



図1. 国立歴史民俗博物館所蔵

図1は①「小あみ町三丁目 かまや治左衛門」のもぐさの薬包、あるいは引札であると考えられる。

- ・ 向かって右側に商品の説明

- ・中央に「かまやもぐさ陳熟艾京都後藤左一郎製」
- ・中央上部に釜の絵
- ・向かって左側に「本家 江戸小あみ町三丁目 かまや治左衛門 同 向店」

といった情報がみとれる。

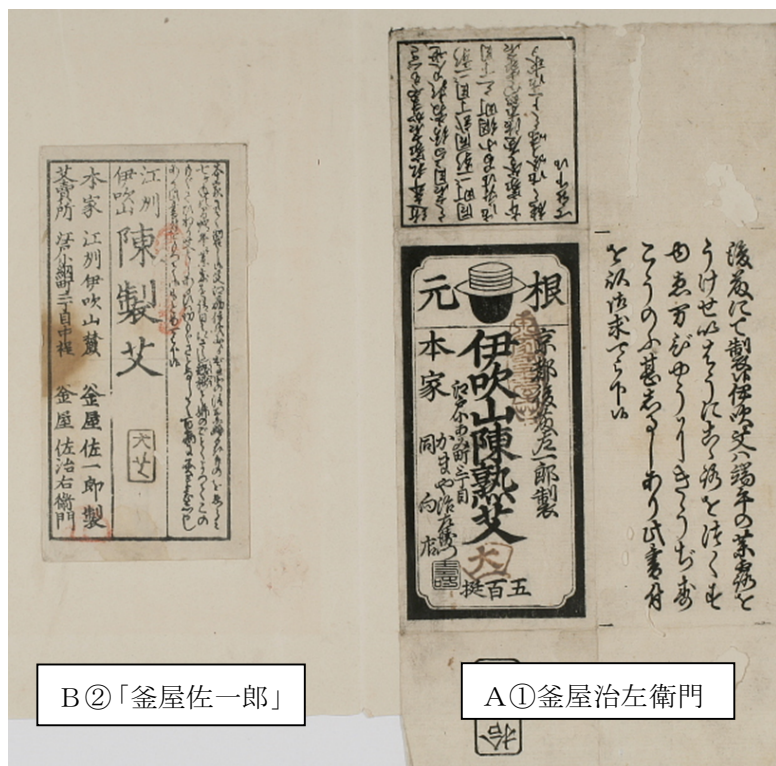


図2. 国文学研究資料館所蔵

図2は国文学研究資料館蔵、日本実業史博物館コレクションデータベースからの引用である。図2のうちAは図1と同じく①「小あみ町三丁目 かまや治左衛門」のもぐさの葉包である。

- ・向かって右側に商品の説明
- ・商標右に「京都後藤左一郎製」
- ・商標中央に「伊吹山陳熟艾」
- ・商標左に「本家 江戸小あみ町三丁目 かまや治左衛門 同 向店」
- ・商標上部に釜の絵と根元の字

図1と内容的にはほぼ変わらない。商品の説明文も「製法」「心」「故」「灸治」といった漢字がひらがなになっているのみで、ほぼ同文である。異なるのは、裏に一文が付されている点、釜の絵の横に「根元」の字が加わっている点である。裏に付されているのは

近年私家名かまやもぐさ之名目にて紛敷類見世同町に二軒同式丁目に二軒御座候間小網町三丁目本家釜屋治左衛門と家名能々御吟味之上御求ヲ可被下候

と、先に『江戸買物独案内』であげたものとはほぼ同じ注意書きである²⁹。「根元」の二文字が釜の隣に加わっているのは、この注意書きとの関連で理解できる。

日本実業史博物館コレクションデータベースの説明によれば、図2のB②「小網町二丁目 釜屋佐一郎製」は、Aと同時に収集されたものである。ここには

- ・右側に商品の説明
- ・中央に「江州伊吹山 陳製艾」
- ・左に「本家 江州伊吹山麓 釜屋佐一郎製 艾売所江戸小網町二丁目 釜屋左治衛門」

といった情報が並ぶ。①の「後藤佐一郎」に対し、②「釜屋佐一郎」、①「釜屋治左衛門」に対し②「釜屋佐治右衛門」と、①の釜屋が紛らわしいと神経をとがらせるのも含つかれる。

①小網町二丁目の釜の絵の左右に、図1ではなかった「根元」が出現するのは、「紛らわしい偽物」対策にほかならないだろう。



図3. 国立歴史民俗博物館所蔵

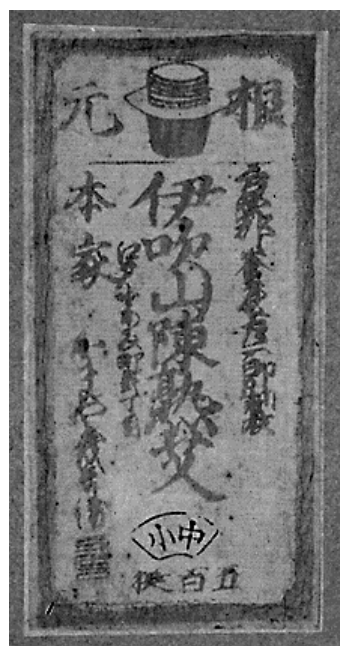


図4. 早稲田大学図書館所蔵



図5. 国立歴史民俗博物館所蔵

しかし問題はもちろん解決しない。④「本石町四丁目 大黒屋清助」が商う「本家 江州伊香郡柏原村 釜屋佐一郎製」の艾の商標には釜の横に「根元」の二文字がある(図3)³⁰。

「釜屋佐一郎製」という点は②と同じだが、どれほど信憑性があるのかはわからない。①小網町二丁目の釜屋は「後藤佐一郎製」の艾を扱っており、それと異なるものであるのは確かである。図4、「かまや彦一郎」製の艾を商う⑤「かまや茂兵衛」も釜の横に「根元」と記している。釜屋艾をめぐる「根元」の主張が相互に行われている。さら図5をみると「万」

²⁹ 『江戸買物独案内』では同町に一軒だったのが、二軒になっている。

³⁰ 図3、図4、図5は朱色の刷り物だが本稿印刷時の見やすさを考慮し白黒に変更した。

の隣に根元が加わっている。これは駒込目町の万屋治兵衛であり、「京都後藤製」の艾を商っている。これも①の「後藤佐一郎製」とは別物であろう。

最初に「根元」を釜の左右に加えたのは①「釜屋治左衛門」で、他はそれを真似たのではないかと推測されるものの、正確なところはわからない。確かなのは商品としての艾の宣伝において「根元」が強調されたということである。

話をキリシタン実録類に戻したい。『伊吹艾』系列のタイトルは、同時期の商品としてのイブキモグサの流行と不可分なものであった。派手な本家争いを行っていた釜屋艾は、人気のイブキモグサとして代表的なものであろう。

一方でキリシタン実録類には『切支丹根元記』『耶蘇宗門根元記』など「根元記」を題名に含むものが多く存在する。先述のように京氏は『伊吹艾』系列のタイトルを持つものは「根元記系」の系譜に入ることを指摘した。京氏は加えて「前書き」—伊吹艾のはじまりの物語として、伊吹山麓で同書を手に入れた顛末を語る—は根元記系にみられるとするのである。

釜屋の商標に表れた「根元」は、キリシタン実録類のうち「根元記」系列の題名と果たして無関係なのだろうか。同書の広がり的一端には、商標としての「根元」を連想させながら、キリシタン実録類を伊吹艾の由来譚として位置づける行為が想定されはしないだろうか。

V おわりに

19世紀に入るとイブキモグサの説明そのものに、キリシタン実録類が引用されていく。

奈須恒徳『本朝医談』文政五（1822）年³¹

近江のいふき艾をもてはやすは永禄以来の事なり。その頃外国より耶蘇の者とも入来て病人の資に薬園の地を乞ふ。信長公伊吹山五千町四方を賜ふ。彼其本国より薬草薬木三千余種取よせてうゑたり。此時の種今に残りて艾葉は南蛮種なりと天教雑話に見ゆ

山崎美成『提醒紀談』嘉永三（1850）年³²

伊吹艾。〈略〉さて近江国伊吹山に、艾草を産することは、ふるき世のことにあらず。これは永禄より後、南蛮人の輩の植しところなりといへり
その頃南蛮人、織田信長に謁し、貧人の病者を救はんために薬園の地を願ひけるに、近江国伊吹山五十町四方の地を賜ふ。南蛮人、その地を平らぎて、薬草三十余種を栽たりといふ。今伊吹山の艾は、その遺種なるべしと云は、さもあるべし

イブキモグサの効能は、キリシタン実録類の物語といよいよ一体化していく。

商品としてのイブキモグサと関連付けながらキリシタン実録類を見直したとき、道術使いのバテレンが持つ治癒力は、彼らがもたらしたイブキモグサの効能を保証する役割を果たす。その力は、布教期の宣教師の霊力への信頼と一見似ているが、内実は大きく異なる。布教期の宣教師は、人々がその危険性をささやき合うほどの「力」を想像されていた。一方

³¹ 国立国会図書館デジタルコレクション参照

³² 日本随筆大成第二期二巻、吉川弘文館、1973年参照

実録類のバテレンは、日本奪国をたくらむ恐るべき存在ではあるが、秀吉の世になるとあっさり追い出されてしまう。キリシタンを「退治」した実録類のうちでは、その恐ろしさはフィクショナルな娯楽なのである³³。

危険性を孕む宣教師の治癒力は、その存在が遠景化するとともに、近世期の商品経済の中で利用可能なものになる。バテレンは道術使いとして不思議な力を使うが、その力は誰でもが購買可能な商品の効能の「根元」として物語られるのである。

参考文献

- 姉崎正治『切支丹伝道の興廃』同文館、1930年
海老澤有道『キリシタン南蛮文学入門』教文館、1991年
海老澤有道『切支丹の社会活動及び南蛮医学』富山房、1944年
海老澤有道『南蛮寺興廃記・妙貞問答』東洋文庫 平凡社、1964年
菊池庸介『近世実録の研究-成長と展開-』汲古書院、2008年
京篤二郎『耶蘇宗門根元記』名古屋キリシタン文化研究会、1994年
小曾戸洋、天野陽介『鍼灸の歴史-悠久の東洋医術』大修館書店、2015年
五野井隆『キリシタンの文化』吉川弘文館、2012年
鈴木昶『江戸の伝承薬-江戸売薬から家庭薬まで』薬事日報社、2005年
東野利夫『南蛮医アルメイダー-戦国に本を生きぬいたポルトガル人』柏書房株式会社、1993年
東馬場郁生『キリシタン史再考-信仰受容の宗教学-』天理大学附属おやさと研究所、2006年
三田村元鐘『切支丹伝承』宝文館出版、1941年
『続々群書類従』第十二巻 宗教部2 国書刊行会、1909年初版

謝辞

本研究の一部は、JSPS 拠点形成事業（A.先端拠点形成型）「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」の助成を得ている。

本稿の執筆にあたり、国文学研究資料館所蔵資料は利用規定に従い掲載させていただくとともに天理大学図書館、国立歴史民俗博物館、早稲田大学図書館より資料の掲載許可をいただきました。また愛知県立大学三宅宏幸氏より資料を借用させていただきました。また本稿は、科研助成グループ（基盤 B）「大航海時代のイベリアンインパクトと日本社会における民衆意識形成に関する総合的研究」研究会で招聘いただいたおりの報告をもとにしていきます。記して御礼申し上げます。

³³ 宣教師の報告書では、人を食うといった表現が頻出するが(南郷、2016)、実録類におけるバテレンは人の身体を傷つけることはなく、人々を騙すことのみ腐心する。